

1999年6月28日発行

新の肝喰 (shin no kani) 宿露

露
<Rojuku>
宿

創刊号

定価 500円

露宿 (Rojuku) 創刊の辞

野宿する人々がついに国からも問題視され始めたというのに、この国の貧困はさほど問題視されてもいない。それは、その問題の視点が実は人間にはなく、環境であつたり、都市開発の視点にあるからなのだろう。

私たちは、野宿する人々の問題とは、貧しさの問題であると考えている。それは、単に失業であるとか、経済的な貧しさだけの問題ではなく、貧乏人が社会から排除させられ、路頭に放り出されるという社会的な貧しさも含まれる。

しかし、野宿する人々に外部から烙印された言葉は、その人間性や個性をことごとく踏みしめるものであった。野宿をせざるを得ないというだけで、かくまで人格を否定するのかと、この社会の恐ろしさを一番感じているのは、日々、その恐怖とたたかい路上で暮らす人々に他ならない。これは同じ人間の問題であると、一体誰が考えないのだろうか？ 野宿する人々が問題なのではなく、貧しい人々を作り、貧しい人々が野宿せざるを得ない社会が問題であると誰が考えないのだろうか？

が、故、本誌は路上から言葉を発することを目的として創刊される。野宿する人々も同じ人間で

あることを言葉でもって明らかにすることを目的とする。

路上には個性がある。路上には人格がある。路上には人生がある。それを誰も認めず、野宿する人々が問題だと言うのであれば、我らは自ら言葉を取り戻すしかない。その言葉を発し続けるしかない。路上の文芸とは、その意味ではラディカルであり、挑発であり、悲痛な叫びである。言葉は自らが忘れ去られないための抵抗であり、自我の強力な表現である。言葉の大河を路上に私たちは洪水の如く湧きあがらせたい。

その最初の一滴を私たちはここに提供する。

本誌は貧しい人々に開放された雑誌であり、そのため、路上でのたうちまわり続けるだろう雑誌である。本誌の目的を達するため、多くの路上の表現者、編集者、販売者を私たちは探し求め続けて行きたい。

仲間たち！

言葉を取り戻せ！

荘厳な俺たちの言葉をこの社会に叩きつけろ！

1999年6月28日

路上総合文芸雑誌「露宿」編集部一同

創刊に寄せて

富士森 和行

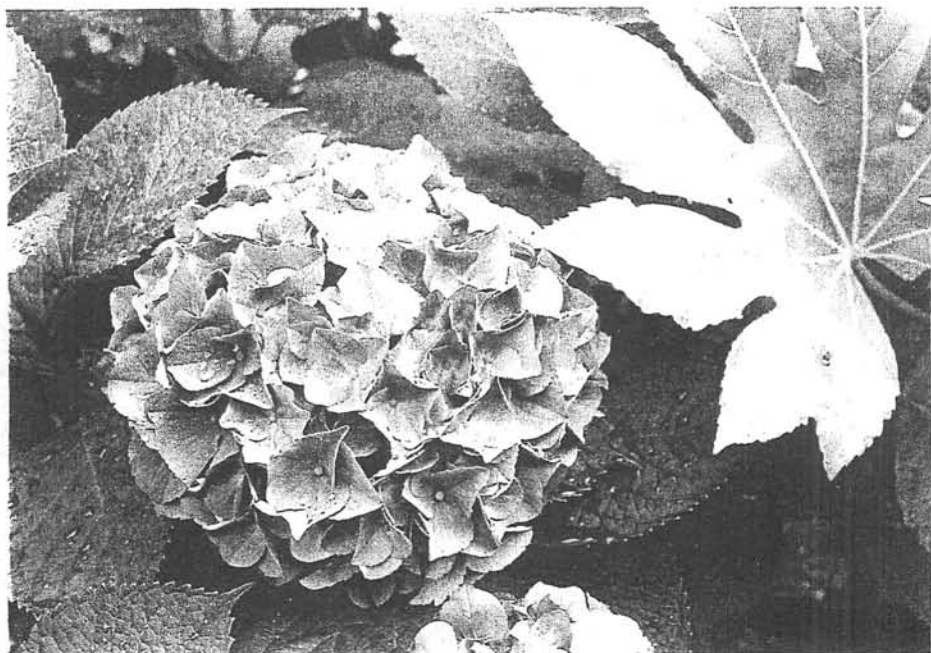
うつし身の吾れにふさわしからむや臓器提供など思ふ一夜あり

恙なく更新了へて生活の場与へられしを喜びとせむ

放浪の影が漂よふ街の川わが景のごと払拭むなし

風薫るある日新しきケースワーカー訪へばそれなりの対応のあり

(一九九九年・五月中旬 自宅詠)



生きる

逆境に生きる仲間

田代 猛

つまずいたって、いいじゃないか。

人間なもの。

雨の日もあらう。風の日もあらう。

嵐の日もあるだらう。

そして、いつの日か晴の日もあるだらう。

幸福と云ふ日は、雨の日や、風の日や、嵐と云ふ日を幾度か送りながら、
出会うのだらうか。

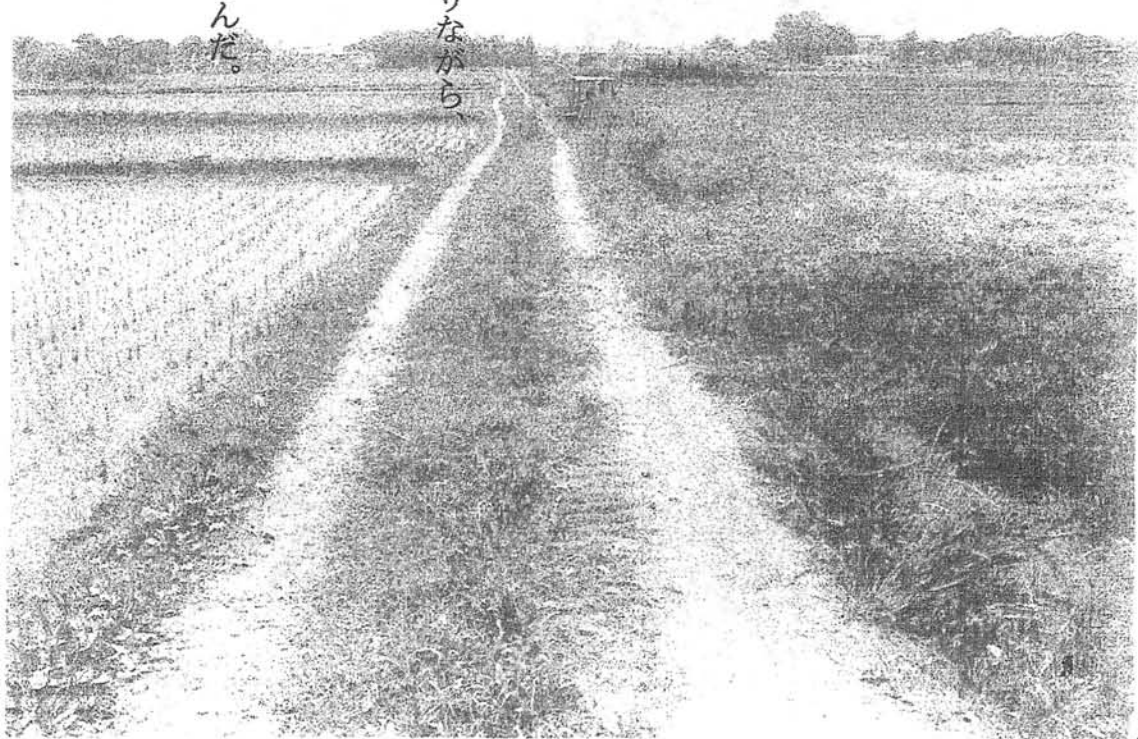
人生と云ふ永い遠い道なもの。

涙もあらう。笑ひもあらう。悲しみもあるだらう。

でも今日、ここに生きてゐるだもの。明日も明後日も生きるんだ。

心に晴の日を確かめながら生きるんだ。

仲間よ、友人よ、生きるんだ。生きるんだ。



雑感

あのシェークスピアの時代の、ミルトンが、ヨーロッパ大陸に響き渡る砲声を聞いて、

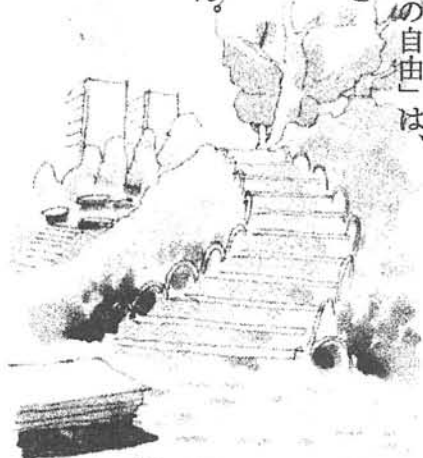
「仲間が自由をつかむために戦っている時、どうして、私個人が座にすることが出来よう」と前線に走った。

ミルトンの友ピアが「リア王」を書き、野宿者の美しさを切々と語った。

だから、私はアオカンをしています。

ミルトンの「言論の自由」は、合衆国憲法の創案となりましたが、いまでも我々はその事を知りません。

Hさん



野宿問題の総合書物創刊！

「季刊 Shelter-less 路上から現代社会を問う」

●NO.1 1999 spring の内容

・寄る辺ない社会

中村 智志

・特集「野宿者と福祉 — 福祉のセーフティネットは機能しているか」

全国生活保護行政アンケート ・ 野宿者の声
林訴訟弁護団インタビュー ・ 佐藤裁判報告

・対談「エサとりのない社会を」

●NO.2 1999 summer の内容

・特集「国のホームレス対策案は有効か」

岩田 正美 ・ 本田 哲朗

笠井 和明 ・ 水田 恵

藤井 克彦 他

・国境を超える失業者たち ヨーロッパの試み

発行 野宿者・人権資料センター 発売 現代企画室
定価 六百元 + 税
全国の有名書店でお求めになれます
または03-3332-6168 四五へ

陽だまり

12

秋戸
空

*山谷の日本堤伝導
所に出入りされている
秋戸さんの詩

その街の一角
伝導所という
集会の場があり

神

イエス・キリストの言葉
を導たえるという・・・
ここは

路上生活者の
人たちの

陽だまり

になっている

だろうか

いくつもの

すぎ去っていった

日常(歴史)もあって

その内で死を

強制された

人もいた

ここ以外の国でも

その死を強制され

死んでいった人たち

(偽りの歴史に

かみついていった

人々)

(世間は多数者が

世のならいとして

狂犬は、処分すべきだ!)

と言う・・・

イエス・キリストのように

強制された死を

十字架に自ら

のぼった人(かかった人)

その十字架を

自らがかついで

人間種の、あらゆる

犯した罪を

自ら一人で

ひっかついで

運んでいった

イエス・キリスト

その十字架にかかった

イエス・キリスト

いろいろな国で

死を強制された

人々

ステューヴ・ピコ、パトリス・ルムンバ

マルコムX、マーティン・キング

そして、チェ・ゲバラ

この地において

佐藤 満夫

山岡 強一

この人たちも自ら

十字架を

背負っていたのだろうか・・・

そんな街の一角で

神

イエス・キリストの家が

陽だまり

になっているのだろうか・・・

「幸せ」について

Nさん

あの時は、

かぎりない悲哀の中で

「ふーっ」と、

この悲哀が越えられるのではないかと。

幾重にも哀しみが続けば、

今度は、

「幸せ」のオブラートで

私自身を包んでくれるのではないかと。

この時、ずーっと先の私の居る深い森の先に
明るい貴女が立っていました。

小 一

神田川 流水を変えた 鯉のむれ

隅田川 月も泣いてる 花火かな

吾を通し 引くに引かれぬ 引蛙る

開山に ほたるゆらゆら 夜登山

盆提灯 ゆらりゆらりと 友をよぶ

彼岸花 増加で飾る 親知らず

お役所も 所かわれば 生意気だ

星空見 でんと居座る 一等地

大病も 勝負を見れば 負知らず

赤提灯 お出お出と 俺を呼ぶ

お迎えは 今だ今だ早い 飯の味

友有りて 生きる喜び 朝を待つ

豆腐について

新宿の孤老爺

社会の底辺にさすらい、ダンボール一枚に夜露を凌ぎ、明日への希望も無く、挫折・貧困・病氣、そして孤独の内にその日を送る人々の味方となって支えてこられ、永々ここに一冊の誌を創刊されますこと誠にめでとうございます。広く皆様のご賛同を得られ刊を重ねられましてご発展されますことを期待すると共に拙文ながら参加できますことを光栄に存じます。

私がこの七ヶ月福祉のお世話になり通院を重ねる間に思った事、感じたことなどをお聞き戴きたいと筆をとりました。

豆腐について

身近にあってありふれた食べ物です。親類もたくさんいます。納豆・ゆば・味噌等々、栄養（タンパク質）の点でも大変なものです。これが仲々味のある奴です。

煮てよし焼いてよし汁にしたらばなお旨い。その姿四角にして角たつ、絹の肌は純白にしてなめらか、軟らかさの点では申し分がない。しかも身を崩さぬしまりはもっている。鍋に入っては、肉とも魚貝とも同座して恥じない。野菜・竹輪・コンニャクなどでも相和する。相手を嫌わず自然に全てに順応する。悟りきつた達人、正に大人然としている。軟らかくして身を崩さずすっきりと立って自らを支える。これはどうみても好く出来た「カッコよい漢」です。

久保田万太郎の歌二首

・もち古りし夫婦の箸や冷や奴

・湯豆腐やいのちのはてのうすあかり

このようになにもにも相和する豆腐は鍋にしてみんなでワイワイにぎやかに食べるのが旨いし、亦楽しいものです。

しかし、この七ヶ月、私の食事は常に一人です。孤食は心の病の最初の兆候と申します。頭痛・肩凝り・不眠そして喜怒哀楽等の八間の情緒が次第に薄れゆく。これが離人症です。豆腐のように軟らかくなにもにも相和する生き方。さて、その反対は、硬いこと云って偉そうな顔をしている人はその内に血管のしなやかさが失われて、動脈硬化で脳梗塞はては、破れて脳溢血、すすんでアルツハイマー痴呆症、もうこうなっては人生も「ハイ、それまでよ」年寄りになると「頑固じじ」に「いいわるバァーさん」嫌な言葉です。



人に好かれて生きるも一生、人に嫌われて生きるも一生。軟らかくしてしかも身を崩さぬ豆腐のように生きるには。

につこり笑ってポツクリ死ぬ為には健康であらねば

これは、南池袋のバス停の薬局でみかけた看板です。実に意味しんですね。深く生きて深く死ぬとでも。おもうままにならぬが浮世。変わりはてたる我が身を嘆き、世を愛い、人を恨んでもすねた夜風が身にしみるだけです。

落ちぶれて袖に涙のかかる時人の心（情）の奥ぞ知らるる

何をくよくよ川端柳、どうせこの世は風まかせ、水の流れをみてくらす。

今や車で申せば、中古車も過ぎて下取りもダメと言われる廃車寸前の身の上ですが、いいじゃないですか。今迄にずいぶんと働いてきました。世間の荒波も嫌と云う程浴びてきました。「もういいでしょう」ここで肩の力でも抜いて、気持ちを切替えます。

うつとうしい梅雨が去れば暑い夏となりやがて秋冬と桜の春を待てばまた一年が過ぎ去ります。

私たちは、このすばらしい自然に恵まれています。感動的な美しさです。この気持ちも身も心も若々しくしてくれ、瑞々しい心を保ち、物にも人にも優しくなり、全てに相和するのでしょうか。老いてなお童べ心をうしなわず、なにものにも好奇心でいっぱいの子供のように純な心で、そう一休さんや良寛さんの優しさを持ち続けたいものです。

私は常々おもっています。この世を生きてゆくには、遊び七分で残り三分を本気にまじめに。あまり思いつめないで、自分を追い込まないで、ゆるゆると。天真に任す（とぼとぼと自然に任せて生きてゆきたい）強くなければ生きてゆけない。優しくなければ生きる資格がない。

角本

輝幸

新宿での野宿生活も10年以上になった。野宿生活で得たものは何もない。むなしさ、ハラペコ、あと色々。どうする？ 立ち直る術は？ この生活は、一人では絶対に生きていけない。長い生活、習慣で、つかれきっている。何百人もの仲間が、各々苦しみ、悩み、それでも生きている。いなかにも「田」できない。兄妹に迷惑かけるだけになってしまふ。自分にいつも言いきかせていることがある。「自殺」だけは絶対にしてはいけないと。プーターロ生活長すぎてイヤになる。疲労と食欲がなくなって本当に死にそうになる。この生活、友達がいないと、絶対に生きていけない。一人だけではダメだ。一人の友人を得ることが大切だ。それが一番大切なことだ。10何年プーターロ生活してきての実感だ。仲間どうしのケンカも絶対いけない。こういう生活だからイライラ、不平いっぱいあるけれども、ガマンして、ガマンして生活しているしかない。これからのガンバリをたよりに、それを心の支えに生きていくしかない。ガンバレ、フレ、フレ。

ひろみち 路上から撮れ!



写真集
東京タワー/通天閣1998
1998・11 30P 定価450



ドキュメンタリービデオ
夜の雨
NIGHT RAIN 東京野宿1998
1998・12/COLOR/STEREO/48min
定価2500

カメラマン 橋本弘道作品集

お求めは
橋本弘道(03)2484(8)4201まで
新宿連絡会 野宿者人権資料センターでも
取り扱っています。

打成進

ずっと我慢してきた。恥を忍びながら、問題を起こしたくなかったから、仲間に迷惑をかけたくなかったから、俺の顔見知りでもあるあのならず者でも黙って言う事を聞き続けていれば、そのうち機嫌良くなって帰ってくれるだろうと思っていた。しかしそいつは度重なる暴力・迷惑行為で心優しい仲間達が苦痛にゆがんでいく。夜中にひきずりまわされ、気にいらないとふめばすぐなぐられる。相手が酒を飲んでた事もあるし、そいつの顔だった人が（俺と親しい人）影響力をおよぼせなかった事をかさにきて、俺などは暴力によって強制的に子分のようにこきつかわれてきた。仲間一人がそれにたえきれずトンコすれば、その責任とばかりに関係のない（管理責任があるのはお前だろうと思いつつも）俺がターゲットとなりボコボコにされたあまり激しい攻撃にぶっ倒れたが、引き起こされた上でビンタの嵐、しまいにはビルにつれこまれて叩く蹴るの行為を繰り返した。もう死んでしまうと思った俺は、そいつに飛びかかり、押し倒して、後頭部にパンチ連打と腕ひしぎ固めというパターンのほとんどプロレス技を無意識に使うと、相手が動かなくなった事にこわくなり、その場から逃げた。自分が死の恐怖があったから追われるように、近くの交番にかけ込むが、ホームレス同士ケンカとわかると、こちらが必死に身柄の保護を訴えているにかかわらず、数々のブジョク発言と共に俺は追放された。もう俺には行く場所がない。頼りになるアドレスはやぶかれてしまったし、たまたま知ってた人にあつて食事をもらったが、もう迷惑はかけられないとばかりにトンコする。見知らぬ土地ではエサも取れるわけもなく、ここんとは水だけで過ごすありさまだ。誰か俺を救ってくれよ。お金がない、欲しくても就職出来ねえ状況ではウエジニするだけじゃないか。

中学校を出てから、学校も行かずに家でぶらぶらしていました。十八歳のときから父と組んで人夫を使って働き出しました。スーパ林道の開削工事です。林道を通す山の斜面の中腹に、人が入れるぐらいの「たぬき穴」を少量のダイナマイトを使って二〇メートルほど掘り進み、そこに大量のダイナマイトを仕込んで発破をかけ、山の斜面を吹き飛ばすのです。山じゅうの木の葉がばらばら落ち、ずっと上のほうからも石が降ってきました。これをやると山全体がたがたになつてゆくのです。やつてる私自身もこんなことやつていいのかなあと思つてました。結局自然保護の点で問題になり、一〇年でできなくなりました。

原生林の中を掘り進むのですが、カツラやカヤの太木があつて、それを正規の買い取り業者が持つて帰りますが、彼ら以外にヤミの業者が買い取りに来て、トラックに酒や食べ物や山のように持つて来しました。

今から思うと考えられないくらい、その頃はお金が入ってきました。従業員の給料を銀行に取りに行くのに、かばんを持つて行つたのです。ちゃんと飯場があるのに、街の旅館から仕事に通い、毎晩のように女を呼んで騒いでいました。

若い時にいい思いをすると人間ダメになつちゃうんですね。

仕事のことでは父とよくけんかをしました。酒を飲んでいつも酔つ払っていました。が、私と二人でもよく飲みに行き、そのことが父にはうれしかったようです。

き

き

が

き

父は酒の飲み過ぎで、私の若いときに胃かいようで亡くなりました。肝臓ガンだったのかも知れないあと今では思っています。

林道工事ができなくなってからは、ダンプや長距離トラックの運転手をしていました。

大型トラックで荷物を運んでいる最中、仕事がバカらしくなってがまんできなくなり、荷物を運んだままのトラックを道路に乗り捨てて新宿に来ました。新宿に着いたときの所持金は7円で、そのときはよく憶えています。四年前のことです。

それからは仕事のあるときはカプセルホテルなどに泊まり、ないときは野宿をしていました。当時はまだ仕事をしていることのほうが多かったです。

その間、酒の飲みすぎで腹水がたまり、救急で入院したことがあります。二年前にはカプセルホテルで食道静脈瘤破裂で大量の血を吐きました。どうしていいのか分からず、血をうけて真っ赤になった両手を見ながら、しばらくはぼんやりしていました。腹水がたまって入院していたときに話しは聞いていたので、もうダメだなあと思いました。

そのとき池袋のカプセルホテルにいたのですが、豊島区の福祉課の世話になりたくなかったので、山手線に乗って台東区に行ってから救急車で入院しました。

母は二年前に亡くなりました。こんなことをしているので葬式には行けませんでした。親不幸をしたと思っています。ただ私がこの暮らしを始めて、母がまだ元気なときに、「これからおれは好きなことをして生きる」と言うのと、「じゃ体に気をつけて、好きなようにしなさい」と言ってくれたのが慰めになっています。

今は戸山公園のダンボール小屋にいて、夜はエサとりのために歩いています。今年に入ってから一度も仕事に行っていないです。

Aさんのお話

石山 泰人

以前私は「沖縄」で仕事をしていましたが、会社の倒産により、沖縄の地で「ホームレス」を始める事となりました。まあ、沖縄での「ホームレス生活」の事はいつか詳しく書きたいと思います。今回は「炊き出し」や「ボランティア」について…。

私が東京（新宿）へ流れ着いたのが、今年の3月下旬、当時に比べると、現在、毎週日曜日の炊き出しに集う仲間の人数が非常に多くなって、配食時の混み方がすごい！！ まあ、他地区からも来ているので、しかたないが、混雑した中で、好き勝手な事をしている人達もいるようで…。

私が一番大変だなあーと感じているのは、日曜日の炊き出しではなく、平日に行う炊き出しに関してである。新宿だけでなく、上野、隅田川等でもキリスト教会の方が、公園等で、集会を開き、その後、集った仲間に、食事（主に、お握り、うどん、パン、コーヒー等）をもらえるのだが、どの場所でも約一時間程度ガマンすれば食事にありつくことができるが、しかし、新宿で集会をしている教会だけは、非常に長い！！ 最近では二時間というロングランを記録している。寒い時期はいいが、夏は問題である。直射日光の中で、集会中に、絶対に神様に呼ばれる仲間（昇天）が出るゾ！！ ハラがへってするのは理解するが、みなさん体には気を付けて下さい。

さて、炊き出しに何度か出ている時にすごく「はらのたつ」事を。

各集会の集っている人達の中に「ちょっとカン違い」している方がいらっしゃる（一部の人）。特に教会の集会は、「歌」～「説教」～「歌・祈り」～「配食」という流れであるが、「集会」が基本で「出席」のお礼に食事を出しましょう、というスタンス。で、みなさんが基本としているのは「食事」で、「集会」は義理！！ まあ～互いにその辺は「アンモクの了解」だろうが、一番イラつくのが、それを無視して、「歌なんかいい、早く食事させろ！」と口に出す人！ だれだってそんな事はわかってるのである！ でなければ、「ホームレス」のほとんどが「クリスチャン」になってるハズ……でしよう。

そして、日曜日の夜の炊き出しで、人数が多いのをいいコトに、2つも3つもドンブリを持っていく人！！ そして、人数が多く、後の人が、前の人を押しつけて、オシあいヘシあいをする人達！！ そのうち、ケガ人が出るゾ！！ 人数以上に食事はあるんだから、あわてなくたっていいのでは？ ある程度、「モラル」をもって行動してもらいたい。みんな大変でしょ！ その「オシあいヘシあい」して、それを「どなり声」注意している姿を、一般（？）の人達が見た時、結局「ホームレス」＝「乞食」と見られてしまうし、「ホームレス」の仲間が、全員そういう風に見られてしまう！ ちゃんとした人もたくさんいるのに！！

一部の人の為に「ヘンケン」をもたれないように、一人一人、きちっとしていただきたい。ちょっと「おかたい」話になったけど、今回は、もっと楽な話を書きたいと思う。

「共響鳴」

裕積

調査コマンダーの 個人的パトロール記録

港区 新橋駅地下1F → 杉斗は3/3 AM 5:00 始発

前坂9	梅町公園	1
西内1	西本公園	1
西新第2	南本公園	3
海通	浅水島	1
東新第1	JR上野公園	1
東坂	甲田公園	1
南第6	前坂公園	1
赤木7	二本松公園	1
赤木7	TBSホール	1
南第4	その家	2
	富士銀行	1
	三和銀行	1

[illegible][illegible][illegible]

夜の新宿
不才の街に
宿無し
龍に言え
夜の冷たい
北風に
眠る家

お腹すいたな
トイレに行き
お水を出して
お水を出して
お水を出して
お水を出して
お水を出して
お水を出して

幸福な寸を
人達に
一言も
かけず
今夜

お金も取られ
何も無い人
新宿駅
花を
今夜

重足どひきつて
お腹が急に
新宿中央公園に
着いた
今夜

冷たい雨
おれ通り
おれ通り
おれ通り
おれ通り
おれ通り
おれ通り
おれ通り

宿青屋

東京路上ふらり散歩

東京の町をぶらりぶらり歩くと、都市の進歩に立ち遅れた奇妙な光景によく出会う。貧しさとか、古さというものは、けったいな形でしぶとく頑固にその存在を主張する。

そんな都市の姿を確認したくて写真屋の岡田氏と同行したぶらぶら班の文京区めぐり。無駄な写真撮らない彼女が珍しくもシャッターを押しまくった、さりげない都市のおかしな姿を御覧下さい。



駒込の駅を降り、六義園の庭園で鯉や亀と一緒に暇をつぶし、その周辺の味のある町並みに誘われて千石駅まで出ると、「人も歩けば犬に当たる」。小石川高校の裏手にある細い路地を入った一軒屋に大きな犬が座っていた。人通りのない昼下がりの路地裏でよほど暇をこいているのか、岡田氏がシャッターを押すと、のっそりと立上がり、憂い気のある目を二人に向け、尻尾をゆっくりと振った。そのスローなしぐさは「路上へようこそ」という社交辞令のようであったが、間違いなくその瞳は「あんたも暇だね」と同情していた。

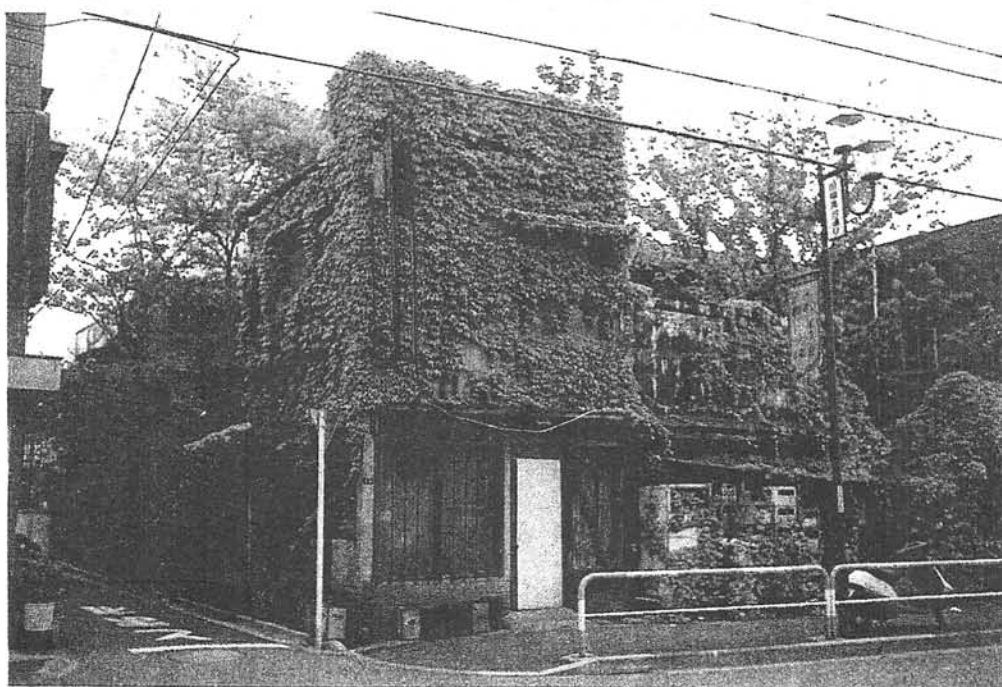


本駒込の住宅地を、出来るだけ細い路地にそって行き来する。山の手の一等地だからさぞ近代的な高級住宅街かと思えば、さすがに文京区だけあり、歴史と文化に彩られた風格のある古風な家並も残っている。そんな光景に飽き、本郷通りを渡って少しばかり行った中学校の脇の細い路地の入り口、遠くから「ありやなんだ」という建物が見えた。古びた家に大きな看板。修理屋か何かの油まみれの空間が場違いにポカリと開いており、中には、オンボロ廃車と真っ黒なチャリンコが2台。一人で「変だ、変だ」と騒いでいると、岡田氏は仕方なさそうにシャッターをカシャリ、カシャリ。庶民生活というのは油と埃がなければならぬ。昭和の一コマのような光景がこんな所にも、さりげなく残っていた。



本駒込から、いつの間にやら千駄木に入る。ここも数々の文人や財界人が住んでいた街だけあって、開発などされてたまるかという気概のある古い町並みと、細い路地が続く。しかし、火事などあったら消防車も入れないだろう路地ばかりで、人ごとながら心配してしまう。そんな路地の一角に平屋建ての古びた家がある。「いいな、いいな、こんな家に住みたいな」と大はしゃぎで岡田氏はカメラを向ける。木造住宅は平屋建てがいい。出来れば長屋スタイルなら、尚更いい。縁台で団扇を仰ぎながらビールを飲み干す。まさに失われた江戸情緒でござる。昔はそうやって人々は行きて来た。都市の家とは単なる雨露しのぐ合理的な場所ではなく、田舎から出て来た单身者や小家族が共同体的に集まる空間であった。ある意味では贅沢なその空間は今となっては懐かしい。

写真・岡田知子
文・笠井和明



団子坂を降り、下町の代表格谷中に入ると、文京区を抜け出て寄り道をしたくなった。そこで、谷中の商店街をぶらぶら北上し、こちらも文士の街、田端に入る。文京区と一変した、風格というよりもわりかし近代的な街の雰囲気戸惑いながらうろちょろし、高台通りに出ると、その一角に緑に覆われた不気味な建物を発見した。元は酒屋であったのであろう、店の前にはビール瓶やらコーラの瓶やらがゴロゴロ。廃屋となつて久しいようで、看板も出入り口も何から何までボロボロ。自然に食い荒らされたような幽霊屋敷さながらの建物であった。怪しげな非日常の光景は、こんな身近にも存在する。「これはすごい」と二人で絶句。人が生きていた場所が朽ち果てるにも時間がかかる。火災にあつても柱は残り、地震にあつても基礎は残る。「ふむふむ、しぶとい、しぶとい」と裏にまで回って探索。道を渡って岡田氏はシャッターを切る。動揺したのか、感動したのか、ピントが少し甘くなった。

どん底の人々

ジャック・ロンドン著
行方昭夫訳（岩波文庫）

ボブ・オハラ

とかく海外旅行なんかに行くと、何を見ても日本と比較したくなっちゃうのが僕ら小市民の常ならば、そんなあなたにお薦めしたい。

本書は若きアメリカ人作家による一九〇二年ロンドンの貧民街への潜入ルポ。日本から見れば遠い国の百年近く昔の古い話である。だが国や時代は違えども貧しき人々の暮らしや感情、生きがいや行動原理みたいなものは、基本的にはそう変わらないんだということを本書は教えてくれる。

宮廷だろうが資本家だろうが、富を極め栄華を誇る者たちが一方にいれば、あたりまえに最底辺に呻吟する人々もいる。問題なのは頂点や底辺が存在することではなくて、その存在が社会の中でどのように理解

されているかだろう。本書に登場するイヤミな救貧所の門番、エラソーな給食所の宗教者、貧しい人々を笑い話にする通行人、ケガをした腕のいい職人を突然無能力者扱いする経営者。そんなイメー

ジは九九年の日本でも簡単に発見できそうだ。
最下層の生活の中にゴワゴワの古着を着込んで潜り込んだ著者はそんな事をからだで味わったり、目撃したりする。その記述はあたかも、果てしない泥沼を呪いの言葉を吐き散らして渡るようで一部うんざりもする。が彼はそれら一切が本来誰でも持っている豊かな人間性を少しづつ「崩壊（させていく）過程」であるとして理解する。たとえば飲酒の習慣は「不幸の原

因」というよりは「不幸の結果」であり、絶望的な居住環境のなかで「元氣な人も元氣でなく」なっていく。ある波止場人夫のように「十年間もこんな調子の飼い殺しの目にあつて、彼は失意の人となった。失意の人は生き続けられない」ようになっていく。そして社会の中で「どん底は文字どおり巨大な殺人機構」として位置し機能していると結論づける。

「五百人の世襲貴族がイギリスの五分の一の土地を私有して」いた当時のイギリスの話なのに、うーん言えてる、当たってる。今と似ている。何故かなと思ったが、先日、フランスで不法占拠闘争をしている人達の話を聞いて、納得した。今の世界も、わずか三百数十人の所有する富が世界の半分近い人々の所有する富と同等なんだって。つまり今、世界は当時のイギリスみたいになったということ。そしてこの百年間、誰もが豊かさを手に入れることに夢中になつても、貧しさをなくすことには大して労力を払ってこなかった、ということだろう。現代の貧困を僕たちはどう理解すればいいのか。再びジャック・ロンドン氏のように考えてみる必要性があるかも知れない。

はり師いが丸の

肝腎かなめ

はり師
いが丸

中央公園で鍼を打つようになって一年になります。過酷な環境下での生活を余儀なくされているアオカンの仲間に、数少ない治療の場、養生の場として役立ててもらえればと思い、始めたことでした。

「悪いことする子にはお灸をすえてやる」という、昔のおばあちゃんの叱咤や、関係ないはずの「必殺〇〇人」の印象が何故か強いようで、残念ながら、鍼灸には抵抗があるという方が少なくないのが現状のようです。

そんなわけで、毎回患者さんよりも、めずらしい(?) 鍼灸治療の様子に興味深げに覗いている仲間のほうが多く、現場は結構賑やかです。決して見せ物ではないのですが、肩があがらないという患者さんに鍼を打って、10分後には動くようになったりすると、歓声があがったこともありました。

「手当て」という言葉がありますが、これは痛い部分をさする行為からきています。おなかをこわしたら、腹部をなでたり、つらいところを揉んだりするのが、手当ての基本です。鍼はその延長で、昔、よく筋肉がつったり麻痺したりして困っていた人たちが治療に用いるようになったのが最初とされています。

そういう意味では非常に簡易でささやかな治療です。大したことないのに、わざわざ福祉を通して病院にかかるのは抵抗があるという方が少なくないと思いますが、いちばんいいのは悪くなる前に治すことです。大仰なことはできませんが、鍼灸は症状が悪化する前の治療にも、病気の予防としても効果的です。

「あいつには、でっかいお灸にしてやってくれ」「五寸釘ぶちこんでやってくれ」と、楽しそうに野次を飛ばしてくださる先輩方、いつも場を盛り上げてくれてありがとう。どうぞ次回は野次を飛ばされる側になってみてください。五寸釘は専門外ですが、お望みであれば、五寸の鍼ならお入れすることも可能ですよ。

新宿では、毎月第二日曜日、炊き出しの後の医療相談の脇で治療をしています。気軽に声をかけてください。

生きている



はるしあん

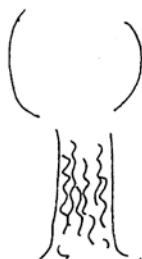
どんな土地でも
何を吹かせる自信がある
人は貧乏草と叫んでせせら笑うけれど
どんなのへっちゃら
あたし、強いのみ



あーい みんね
おいらを嫌わはいでくれよ
ふいふも生活が
かかっているんだ
この不況時、なんでも食わなきゃ
やてらんはいだろ、カー



からす



いちよう

わしの葉が東京都のマークじゃと?
どんなアロさん
わしの木の月を角取ったことが
あるかのお? 一度角取れは
心ぬぬほどの個性の持ち主なんや
エヘン

5月・新宿中央公園にて
ふんたみよこ

芝原美穂子

私が、炊き出しやパトロールに参加して、4ヶ月になります。はじめは、学校の春休み期間中だけということだったのですが、野宿者の方々とお話ししていると楽しく、私にとって毎週日曜日は、貴重な時間が過ごせる大切な時となりました。そもそもなぜ、私がこの活動に参加するようになったかということをお話しします。

私が池袋にある学校に通うようになって、朝早く池袋に行くのと駅の構内に野宿者の人が大勢寝ていました。私は、まずその野宿者の多さに驚きました。そして、会社や学校に行く人は、そこに寝ている人をまるで気にしていないように通り過ぎていく姿にも矛盾を感じました。それから、私は本屋に行き、野宿者の関連する本を読みました。テレビでも野宿者を取り上げた放送をよく見るようになり、前にもまして、気になるようになりました。そして、実際に野宿者の方とお話をしてみたいと思ったのです。

こうして、私は炊き出しやパトロールに参加するようになったのですが、今までに野宿者とお話したこともなく、わからないことだらけだったので、参加する前はとても不安でした。しかし、実際参加してみたら皆さんはとてもやさしく、暖かく迎えてくれました。今では、多くの人に顔を覚えてもらい、いろいろなお話をしています。私が野宿者の方々に抱いていたイメージも大きく変わ

☺-僕(私)らはみんな

公園に居るのは
人間だけじゃないよ、巻



甘くてさっぱりおいしいから
みんながあたしに苗(こ)ったす?
ウフフ...

公園に住んでいる人たちに
拾(ひろ)ったニャーニ
外に出るのはまだ悪いから
ダニがーれの中で暮(く)らっているニャー



にゃん = 5 兄弟(姉妹)

みんな元気ですか?
僕の7(なな)が迷惑(めいわく)を
かけているとうですか?
お許(ゆる)して下さい。777777



りました。具合が悪いと思ったら、薬をくれ、寒
いと言ったら、洋服を貸してくれたりと言った
本当にやさしい方が多いと思います。そして、み
んなで共に協力して暮らしているの、人を思
う気持ちが強(こ)いように感じます。
私も、野宿者の現状が少しわかったぐらいで、
まだまだ詳しくはわかりませんが、世間の人々
が抱えている野宿者のイメージと実際は、全然
違うと思います。野宿者の方々と一般の人々が
もつと触れ合う機会があったらみんな悪いイ
メージはなくなるように私は思います。
炊き出しやパトロールに参加するようになっ
て、私は皆さんから多くのことを学びました。人
間が生きていくのは、簡単なようで難しいとい
うこと、人間は弱いようで強いということ、今
まで生きてきて、私が考えてこなかったことを
この活動に参加するようになって考えるようにな
りました。
何か少しでも役に立てばと思って活動に参加
しましたが、私ができることといったら、皆さ
んのお話を聞くぐらいしかできません。だから、
何か嫌なことがあって、それを話して少しでも
スッキリしてくれたら嬉しいです。しかし、私
の方が皆さんに勇気づけられ元気になっている
ような気がします。そして、いっぱいいっぱい
笑っています。皆さんにもいっぱい笑ってほしい
私にとってこの活動に参加することはとても
貴重なものであり、よい体験をさせてもらっ
たと感謝しています。

第1回

東京

ぶらぶら

日記

b y ぶらぶら班

あじさいの花が道々に咲く、どんよりとしたある土曜日、芝浦寮の跡地に行ってみた。

田町の駅、芝浦口の階段を降りるのは三年半ぶり。かつて港湾荷役労働者の姿でにぎわっていたであろうこの町に足しげく通ったのは、都市博覧会が中止された年の、年の瀬も迫った頃である。都市博覧会で使用する予定だった「動く歩道」が何故か新宿駅西口四号街路に据え付けられる事が決まり、そこで寝泊まりしていたおっちゃんらが立ち退きを迫られ、あの頃は連日のようにピラ撒きや、集会や、デモと、僕らはあたふた動きまわっていた。この見知らぬ町に来るようになったのも、そんな縁からである。東京都はただ追い出すだけでは格好が悪いと、臨時のプレハブ収容所が設置できる場所を探していた。この場所探しもかなり難航したのであるが、結果として芝浦四丁目、当時「芝浦番外地」と僕らが揶揄して呼んだ運河に囲まれた東京都交通局所有の空き地に決定され、その施設名は芝浦寮と名付けられた。もちろん収容所が出来たからと言って強制排除は許される筈はなく、この芝浦寮も僕らの反対運動のターゲットとなった。

駅前の古びた商店街は当時のままだ。かつては肉体労働に疲れたおっちゃんらが一杯ひっかけたであろう一杯飲み屋などの姿はそこにはないが、なんとなくそれと思しき店も数件が残っている。今時の駅前とは雰囲気のもろで違ふさびれた狭い駅前通りは車もさほど通らず、人通りも少ない。新芝橋を渡ると、運河沿いに細長い緑あざやかな遊歩道が見えた。これだけが当時とはなかった光景であった。後は月日を感じさせないいつもの殺風景な芝浦の姿。旧海岸通りを左に折れ、広い道路を走る車の騒音にしばらく身を浸すと、ガードレール脇に廃物を積み重ねてある築数十年は経つであろう、今は廃屋いになっている木造平屋建ての店がのっぺりと現れ、その先には、都心には珍しくなったボウリング場。信号を渡り、倉庫とオフィスビルの間を行くと、都有地のある広大な空き地へと続く古い橋が運河の上にかかけられている。その手前にある小さな公園もそのままであり、人ひとりいない。古びた橋の先、空き地の手前一角に建てられたフェンスで幾重にも囲われたプレハブ施設の姿は、今はもうない。

この運河に囲まれた都有地の島は、確か再開発かなにかにひっかかっている土地で、芝浦寮は三か月使用した後で取り壊され、その後、都営住宅か何かが作られる予定であると、僕は当時そう聞いていた。けれど、それもどうせバブル期の計画

だろうから、おそらく財政難でままたらずに、芝浦寮閉鎖後も、そのままこの空き地は放置され続けているのであろう。何かしらの開発の手が延びているだろうと予想して来たのであるが、意表をつく当時のままの面影に、何故かしらホッとした気分がわき上がった。期間限定施設である芝浦寮がこの場に建てられた、たった三か月のために、当時、地元住民をも巻き込で、この地に騒動が起こったことなど、今は想像も出来ない。倉庫の前には地元町内会が反対の意思を表明する大看板が立てられていた。新宿から緑ののぼりをついだおっちゃんらの無届けデモが何度も行き来した。運河を越える橋のたもとでは、幾度も東京都職員とのみ合いが起こった。フェンスを蹴やぶりで乱入するなんていうトラブルもあった。東京都職員は住民説明会の場で「橋が一つしかないので管理しやすい。安心して欲しい」などと物騒な発言もした。警察は二四時間警備でこの場所を監視していた。

三年半ぶりに来る「芝浦番外地」を囲む運河にかけられた、たったひとつの古びたコンクリートの橋の手前には、当時のままであるジャバラ式の開閉口があったが、僕らが来た時、そこは何故か人が出入りできる程開いていた。躊躇なく僕はそこから橋を渡る。このコンクリート橋、真ん中にレールが二本残っており、おまけに欄干などもなく、かつては、貨物車でも走っていた工場の跡地のような、無骨な橋である。運河の川はいつものようによどんで、ゴミが

浮いている。欄干がないだけで、水面がものすごく近くなるのも不思議な感覚だ。

橋を渡ると、左手には、芝浦寮が建てられるため、この場から追い出された廃品回収を営むおっちゃんのかつての商売道具などが、あの当時のまま散乱していた。洗濯機やら、油まみれの機械やら、もはや粗大ゴミ同様の姿になったとは言え、ある一人のおっちゃんの不幸を思うと、ゴミと化した商売道具も人の執念のように感じる。

芝浦寮はコンクリートの基礎だけを残し当時を思わせるなにもそこには存在しなかった。この場に何があったのか、誰も今となつては分からないくらいに。

鬱蒼とした茂みの中にタクシーが十数台駐車しており、ウンちゃんらが、談笑している。臨時の駐車場にでもしているのだろうか？その島の遠くには、当時もあった消防団の訓練施設が小さく見える。あとはただの荒れ果てた広場のよう。運河沿いには南方の密林のような木々が勝手に伸び放題。その場に立ちつくし、海からの風に打たれていると、まるで夢の中にいるみたい。静かな時間がただ流れていた。

「この先は通り抜けできないよ」

どこまでも歩いていきそうな二人連れを見兼ねてか、タクシーのウンちゃんが声をかけてくる。

「普段はここは開いてないんだ。今日はボウリング大会があつてね」

タクシーのウンちゃんと一緒に仕方がなく橋を引き返す。なるほど、タクシーがとまっていたのは、会社の親睦会でもやるからなのか。この広大な空き地を駐車場として臨時に借りただけの話のようである。

「ここは昔都電の車庫でね、ほら、このレールがその跡だよ」

ウンちゃんは、橋の上を指さして言う。錆び付いたレールにつられてこの島に入り込んだ物好きだと思つたからかも知れない。

古びた橋のレールの意味が三年半後にひよんな事からようやく分かった。都電倉庫の跡地に芝浦寮は建っていたのだ。何だか今思うとそれもおもしろい。かつてそこに何があったのかさえ知ろうとしなかった僕らは、ある寒い冬、三か月間だけ、この場に芝浦寮という施設があつたことだけは覚えていた。

ウンちゃんと分かれて、芝浦寮を後にした。



第6回新宿夏まつり

8/8 (日)、14 (土) 新宿中央公園ポケットパークにて

8/15 (日) 新宿中央公園ちびっこ広場にて

新宿駅西口より徒歩15分、時間はいずれも昼から夜にかけて

今年も夏まつりの季節がやってきました。今年の夏まつりは、例年以上に「野宿の仲間の、仲間による、仲間のための祭り」をめざして、現在、鋭意準備中です。期間も拡大し、仲間による演劇や仮装行列、手作りのお神輿やはっぴも登場する予定です。

是非、多くの方々に第6回新宿夏まつりへのご支援とご協力をお願いいたします。

夏まつり賛同カンパをお願いします。

カンパ送り先：郵便振替口座 00170-1-723682「新宿連絡会」あて

「夏まつり賛同金」と明記の上、お振り込みください。一口2000円です。

また石鹸、タオル、Tシャツ、うちわのカンパもお願いします。Tシャツ（できれば無地がベター）とうちわは、仲間の手により「夏まつりオリジナル仕様」に仕立てられる予定です。下記住所までお送りください。

第6回新宿夏まつり実行委員会

〒160-0015 東京都新宿区大京町3新大京マンション304号「スペースかばす」気付

TEL 03-5367-5666 (稲葉呼出) / 070-5072-7788 (野本) FAX 03-5367-5667

路上からの提言

「路上生活者問題」に関する私たちの見解と政策提言

A4判70P 定価800円

はじめに

- 第一章 「路上生活者」の現状
- 1、東京における「路上生活者」の概数
 - 2、階層的（質的）な構成と根拠
 - 3、「路上生活者」の困窮なる生活

第二章 「路上生活者」のニーズ

- 1、「上からの救済論」批判
- 2、アンケートから見るニーズ把握
- 3、ニーズの充足の努力と手段
- 4、旧来型貧困概念と方法論からの転換
- 5、ニーズを充足させる方法論について

第三章 「路上生活者対策」の現状分析とその評価

- 1、「路上生活者対策報告書」の評価
- 2、現行の行政サービス
- 3、生活保護と他施策の位置づけ
- 4、自立支援事業の現状と課題
- 5、労働・衛生・住宅施策の検証

第四章 政策提言

- 1、「路上生活者対策」体系の整理
- 2、「自立支援関連施策」に関する提言
- 3、労働・住宅・衛生分野に関する提言
- 4、生活保護関連施策に関する提言
- 5、「不法占拠」対処に対する提言
- 6、課題的な提言

おわりに

お求めは新宿連絡会〇九〇（三八一八）三四五〇まで。
新宿模範会、野宿者人権資料センターでも取り扱っています。

大胆不敵！
新宿連絡会が世紀末に送る
衝撃の「路上からの提言」
好評発売中！

露宿 目次

表紙写真	野口 京子	1
創刊の辞	富士森 和行	2
創刊に寄せて	田代 猛	3
生きる	Hさん	4
雑感	秋戸 空	5
陽だまり	Nさん	6
「幸せ」について	小一 (KOICHI)	7
短歌 12 首	新宿の孤老爺	7
豆腐について	角本 輝幸	9
手記	打成 進	10
ききがき	石山 泰人	11
共鳴	裕積	13
パトロール記録	調査コマンダー	14
無題	松本 勇二	15
東京路上ふらり散歩	岡田 知子	17
露宿の書棚	笠井 和明	21
はり師いが丸の肝心かなめ	ボブ・オオハラ	21
僕らはみんな生きている	はり師いが丸	22
炊き出し・パトロールに参加して	おんた みよこ	23
東京ぶらぶら日記	芝原 美穂子	25
文中写真	ぶらぶら班	25
	岡田 知子	

R o j u k u

あなたを広告いたします。当雑誌では広告を募集中。半ページ5000円、1ページ1万円（値下げ交渉可）。ライバル雑誌から、サークル案内、新製品、発明品、新装開店目玉セールから恋人募集、さてはあなた自身の広告まで、何でもござれ。え？ こんな雑誌じゃしょうがない？ いやいやいや、何と言っても当雑誌は購読者10万人（希望推測）のトレンド雑誌。ぜひぜひ、下記までご連絡を！ 限りあるページ数、早い者勝ちですぞ！

★「露宿ペン倶楽部」をつくります★

路上文芸総合雑誌「露宿」ついに創刊いたしました！そこで我らかつての文学者達の努力に学び誠にレトロな手法であるが「露宿」を媒体とした「ペン倶楽部」を発足する事にしました。まあ、なんの事はないお茶飲み親睦会のようなものです。何ごと語りあえば、新しい発見もある。「露宿」を読み、アハハと思ひ、何らかの批判力、創造力を感じた人は、是非とも我が路上文芸サークル「露宿ペン倶楽部」に來れ！共に語り、言葉を奪い返していかな！

日程 7月17日（土）午後2時、新宿区立中央公園ポケットパーク（北東角）集合。会合は芝生広場などにて4時頃まで。

8月14日（土） 上に同じ。
（雨天の場合は中止、連絡は090-3818-3450 笠井まで）

この雑誌は、路上生活者の方達が読み、書き、表現をする場を提供しています。一人でも多くの路上生活者の方に手渡したい為、発行部数が増えれば増える程、赤字になるという宿命です。創刊早々、心苦しい限りですが、多くの方のご理解とご支援をお願い致します。皆さんのお気持ちに届く、熱く丁寧な雑誌づくりを目指します。

◆定期購読一年間5000円で大募集中◆

◆購読費・カンパ送り先◆

郵便振替口座：

00170-1-723682

「新宿連絡会」

編集 集後記

ずっと、ずっと待っていた。この日がくるのを待っていた。ここに夢がある。思ひがある。この手を伸ばしたらつかめるもの、空回りするもの、夢からこぼれ落ちていくもの、あっついあっついもの、すべてを伝えてゆきたい。

「露宿」— 誕生。

編集：露宿ペン倶楽部

発行：新宿野宿労働者の生活・就労保障を求める連絡会議（新宿連絡会）

連絡先：〒111 東京都台東区日本堤1-25-11 山谷労働者福祉会館気付

：☎ 090-3818-3450

：FAX 03-3876-1869

メール：inaba@jca.apc.org